

# JABT Newsletter

発行所 日本行動療法学会 〒112  
東京都文京区大塚3-29-1  
筑波大学学校教育部内  
Tel. 03-946-5491

発行責任者 内山喜久雄  
編集責任者 原野広太郎

## 日本行動療法学会第4回総会 — 於・鹿児島大学 —

日本行動療法学会第4回総会は、昭和53年9月30日(土)、10月1日(日)の2日間にわたり、鹿児島大学(第4回総会会長 金久卓也鹿児島大学医学部教授)にて開催されます。

個人研究発表、シンポジウム、特別講演(W. H. Gantt博士)などが予定されております。多数、参加されることを希望します。

### W. H. Gantt 博士を迎えるにあたって

鹿児島大学医学部教授

金久卓也

来る9月30日～10月1日に当大学において第4回日本行動療法学会が開催されることになった。この機会に、パブロフの弟子で、アメリカに条件反射学を導入し、この方面の学問の発展に指導的役割を演じた William Horsely Gantt 博士をお迎えして、アメリカにおける条件反射学発達の歴史について、私的な回想をまじえながらお話しいただくことになった。

実は私の恩師でありニューヨークのコネル大学の今はなき Harold G. Kloff 博士(ハーバート大学の生理学者 W. B. Cannon 教授に学び、さらにロシアにわたってパブロフに学び、帰米後は長い間コネル大学の神経学の教授として、ストレスと疾病との関係につ

いての広範囲の研究をなしとげ、実証的精神身体医学の第一人者としてよく知られた人)がガント(以下敬称略)の親友であり、私もウォルフの紹介でジョーンズ・ホプキンス大学のパブロフ研究所を訪ねてお目にかかったことがあった。もう20年も昔のことである。ガントはもう相当のお歳であるが、実にお元気で今なお現役でいろいろな活動しておられると聞いていたし、私としては Wolff を通じての多少のつながりもあり、学会が創生期の日本行動療法学会でもあるので、思い切って来日をお願いしてみることにしたのであるが、幸い御快諾を得て喜んでいる次第である。

ガントが監修している双書に、“Banner stone

*Division of American Lectures in Objective Psychiatry* (Charles C Thomas) というものがある。その1冊として4年前に N.I.H. の Joseph Warren Cullen 編集の *Legacies in the Study of Behavior - The wisdom and experience of many* という本がある。この本は行動科学および生物医学の領域の研究で国際的に知られた11名の老大家を選んで、次に続く人々のために書いてもらった文を集めたものである。

ガントはこの本に *"A Scientist's Last Words"* という一文を寄せているが、この文と2~3の資料によって、彼の略歴を紹介しておきたい。

ガントは1893年10月24日米国バージニア州のウインジーナで生まれた。彼が3才になる前に父が死亡し、母は学校教師として働きながら2人の男の子を育てた。こうしてガントの初等・中等教育を通じて彼に最も強い影響を与えたのは母親であり、彼自身「私は13才までは母親の教育を受けた」、「母の宗教的原理は私の一生を通じてのかがり火であった」と語っている。

大学はノースカロライナ大学で心理学を学んで1917年に BS. をとり、3年後バージニア医学校で M.D. の学位をとっている。

幼くして父を失ない、学校教師としての母の収入で育てられ、医学校の初めの2年間はグリーンズボロー高校で化学と物理の教師としてのアルバイトをし、医学校の最後の2年間は寛大なイトコからの借金にたよらねばならなかったガントは、経済的にはいつも苦勞を続けねばならなかった。ガント自身こう書いている。

「私の大学時代を考えてみると、次の1年の経費をどうしたらよいかはいつもわからなかった。私が38才になってジョーンズ・ホプキンス大学に職を得るまでというのは、次の年の経費をどうしたらよいかわからない時期が多かった。経済的にいつも困っていて一番残念だと思うことは、結婚して子供を持つことを41才のときまで延期せねばならなかったことである。私は45才頃になるまでは、大学時代とパブロフのもとで働いていた時代の借金を返済することはできなかった。ソビエト政府は、私の最後の2年間にはわずかながら給与を与えることを申しでたが、私はマルキシスト政府への義務を負うのを好まなかったので断わった。」

ガントのこういう生い立ち、一方では彼自身に自分の進むべき道を考えさせ、価値ある研究とは何かを見極めてそれをいつまでも追究してゆく執念をますます固めさせる契機になっているように思う。彼はこう書いている。

「大学2年になってから私はもうよい成績をとろうという考えは捨ててしまった。私はもっぱら理解することにつとめた。私の学業成績は最上位から3分の1ぐらいまで下がった。私は学ぶためによく質問するので、ついに或外科の教授は怒ってしまって「お前は質

問をしすぎる」といって叱った。しかし例外もあり、Halstead 教授や Adolf Meyer 教授は、いつも質問と討議を歓迎した。」

医学生ガントはもう独自の道を進み始めていたようである。

医学校卒業後、ガントはボルチモアのジョーンズ・ホプキンス大学のメリーランド病院で2ヵ年間肝臓の研究に従事し、続いてロシアにわたった。1922年のことである。1922年というと、1917年の3月革命、次いで11月革命によってロシアの専制君主政体が崩壊し、現在のソビエト連邦が形成された年である。ガントのロシア渡航は、第31代大統領 Herbert Hoover のもとで始められたアメリカの救済事業局 (American Relief Administration, ARA) のペトログラード班の班長としての仕事のためであった。

ガントのソビエト滞在は3ヵ月の予定だったので、彼はスーツケース一つと、その間に論文もまとめようと思い、実験データを入れた小箱を一つ持参しただけであったという。だが、ガントは1922年10月29日、ペトログラートでパブロフに会い、その研究成績を見せてもらって、この人のもとで勉強したいとの決心を固めた。ARAの仕事でまた人びとは、救済業務がすむとロンドンの司令部に報告してロシアを去らねばならなかった。ガントはパブロフのもとで働きたいと申しでたが、ソビエト政府は簡単に許可してくれなかった。彼は許可が下りるまで1年間待たねばならなかった。その間ガントはロンドン大学に籍をおき、アメリカで始めた肝臓機能の研究を続けている。

ガントは1924年1月ロシアに帰り、その後1929年までの5年間、ペトログラードの実験医学研究所でパブロフに学ぶことになる。当時を回想してガントは語っている。

「私は犬のようにパブロフにくっついて離れず、彼のものの考え方、彼の科学がどんなものであるかを知ろうと努めた。彼こそは科学の世界における最も偉大な天才の一人であり、あらゆる時代を通じて最も偉大な人間の一人であると思ったからであり、この考えは今なお変わらない。」

革命後のロシアの生活は苦しかった。終戦後の日本のことを思いだすと、ガントの次の話は実感としてよくわかる。

「この5年の間、私は困窮を極めたロシアの人びととほとんど同じような生活を送らねばならなかった。私は明らかな栄養失調にはならなかったが、時々ものすごい空腹をこらえねばならず、何日にもわたって食物にありつけないこともあった。1924年、栄養不良のため肺炎になってあと2年の間、私は血痰を出し、おそらく結核になっていた。私は運動が一番よいと思ひ、雨の日も、雪の日も、零下何度かの寒い日も、毎日1時

間から1時間半の間、自分をむち打って歩き廻った。ロシアでは何もかもが不足していた。1927年から28年にかけては、動物実験の記録用紙を買ったり1ポンドのパンを買うために、2時間も行列せねばならなかった。1924年から1929年当時は、アメリカはロシアに公的代表者を派遣していなかったので、私は一部のんびりから非公式の外交官と見られていた。”

ガントはパブロフのもとで条件反射学の研究に従事しながら、パブロフの条件反射の本を英訳し、また *British Medical Journal* にソビエト医学についての一連の論文を発表し、これらは後になって“*Medical Review of Soviet Russia*”(1928)という題の単行本として発表された。ガントがソビエトで行なった仕事の一つは、戦争、飢饉、革命というこの異常事態が疾病の生態に及ぼす影響についての調査と観察であり、これは後になって有名な医史学者の F. H. Garrison によって、地理医学 (geomedicine) の始まりとして高く評価されている。

1927年、ガントはアメリカに帰った。当時彼は“帰国後どうしたらよいかのあてもなかった。”と語っている。しかし、彼は思いがけぬ幸運にめぐまれた。アメリカの生物学的精神医学の父と言われる Adolf Meyer 教授の依頼により、ジョーンズ・ホプキンス大学にパブロフ研究所をつくり、ロシアの条件反射学研究の伝統を発展させる任務を与えられるようになったのである。共産主義への反感の強いこの時代にマイヤーがこういう決心をしたのは、心理学者の John Dewey、ロ

ックフェラー財団ヨーロッパ支部長の Alan Gregg の推薦もあったからである。こうしてガントはその後40年にわたってこの大学を居城として、アメリカにおける条件反射学の発展に精進することになるのである。

ガントは1959年にジョーンズ・ホプキンスを退官して名誉教授となった。しかし、1964年までは同大学のパブロフ研究所の長をつとめ、この年に後任の Joseph V. Brady 博士に席をゆずっている。また、1959年の退官の年に招聘されて、メリーランドのベリポイントにある VA 病院にパブロフ研究室をつくり、85才の高令となった現在もお研究に情熱を燃やしている。2年位前のジョーンズ・ホプキンス大学のアラムナイ・ブルタンは、ガントのこのバイタリティーをたたえて、“奇跡の人”と言っていたが、もっともなことだと思ふ。

ガントの研究発表の論文は約200を越し、著書とソビエト医学の訳書が計7つ、編書が15ぐらいある。著書として特に有名なのは“*Experimental Basis for Neurotic Behavior*”であろう。ガントが現在も主任編集者となっている学術誌としては“*Conditioned Reflex*”“*Soviet Neurology and Psychiatry*”があり、また Pavlovian Society のリーダーとして、“*Pavlovian Journal of Biological Science*”の編集にも従事している。

ガントは“人間及び動物の精神生物学及び精神病理学の知識を拡大させた”というその功績に対してノーベル賞を授与されている。

岩崎学術出版社 東京都文京区小日向1-4-8 〒112  
(947) 1631 振替東京7-58495

## 心身障害事典シリーズ 全5巻

監修 内山喜久雄

- \* 幼児・児童・青年の各心身障害の指導・治療・研究・教育にたづさわらる方がたに必要な理念、知識、技術その他を広く提供
- \* 心身障害を、情緒・知能・身体・視覚聴覚・言語の5種の専門的領域にわけ、医学・心理学・教育等の関連領域の第一線で活躍する専門家が執筆
- \* 最新の研究成果をもとに、臨床実践および研究に直接役立つ内容を網羅

各12,000円(分売可)

情緒障害事典	(既刊)	編集	高野清純・稲村 博
知能障害事典	(既刊)	編集	齊藤義夫・小林重雄
身体障害事典	(既刊)	編集	小池文英・林 邦雄
視覚・聴覚障害事典	(8月刊)	編集	佐藤泰正・吉江信夫・岡田明
言語障害事典	(9月刊)	編集	内須川洸・高野清純

## ■第2回行動療法研修会 開催要項

主催：日本行動療法学会

- 1.日 時：昭和53年9月28日午後1時～  
9月30日正午まで
- 2.場 所：〒892 鹿児島市坂元町2236  
電話0992-47-8161  
鹿児島宿泊所「かごしま荘」
- 3.定 員：約70名
- 4.参加費：7,000円
- 5.開催主旨：行動療法の基本的な考え方と実際の適用  
を習得するとともに、行動療法の新しい  
動向を知る。
- 6.連絡先：鹿児島市宇宿町1208-1  
鹿児島大学医学部付属病院検査部心理室  
園田順一
- 7.プログラム

月 日	テ ー マ	講 師
9月28日 (午後)	受付・オリエンテーション  行動療法序説 (行動療法とは、行動分析、 技法のあらまし)  行動療法と行動理論 バイオフィードバック法	鹿児島大学 医 学 部 園田順一 高山 巖  上智大学 文 学 部 平井 久
9月29日 (午前)	心身障害児の行動変容 —オペラント条件づけを中心と して—  子どもの行動療法 —登校拒否、緘黙症、嘔吐など の症例を中心として—	筑波大学 心 障 学 系 小林重雄  鹿児島大学 医 学 部 園田順一 高山 巖
9月29日 (午後)	神経症の行動療法  心身症の行動療法 —神経性食欲不振症、喘息など 症例を中心として—	九州大学 医 学 部 山上敏子  鹿児島大学 医 学 部 金久卓也 心身症 グループ

	モデリングと行動療法  行動療法に関するミーティ ング —質疑応答—	筑波大学 学校教育部 原野広太郎  講 師 団
9月30日 (午前)	行動論的カウンセリング  行動論的セルフ・コントロ ール法  閉会・解散	筑波大学 心 理 学 系 内山喜久雄  埼玉大学 教 育 学 部 茨木俊夫

## ■事務局変更のお知らせ

下記のとおりになりました。

〒112 東京都文京区大塚3-29-1  
筑波大学学校教育部内

## ■年度会費について

昭和53年度、過年度の未納の方は至急納入してくだ  
さい。

## ■原稿・論文の投稿

原著論文、資料、ケースレポート等会員からの積極  
的な投稿を期待します。

**自閉児の知覚** A5判. 260頁. 3000円

B. ハームリン, N. オコナー著 平井 久訳

**精神障害と人間関係**

G. R. ロワ著 茨木俊夫訳 A5判. 144頁. 1500円

**思春期の精神病理と治療**

中井久夫・山中康裕編 A5判. 360頁. 4000円

岩崎学術出版社 東京都文京区小日向1-4-8